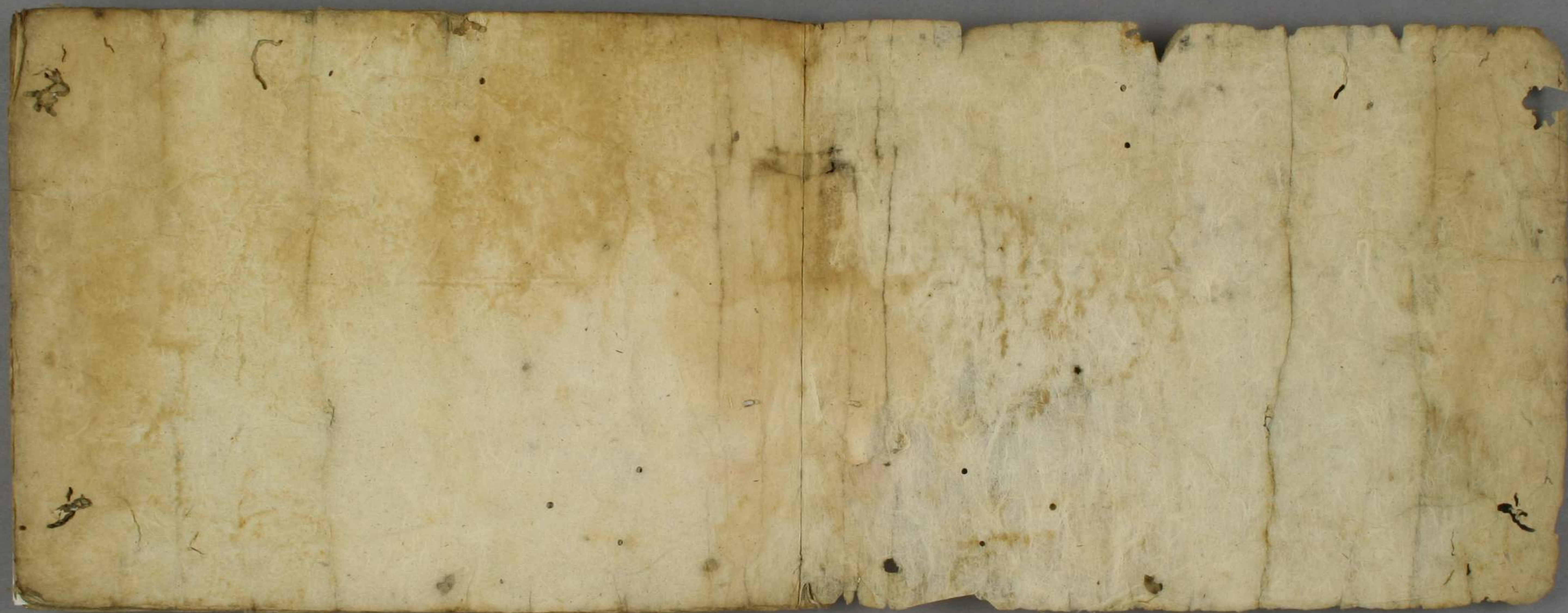




宗吟集

1955





1955

中

山崎



又此の文は、
 おぼろげに
 志う、あまの
 ありま、向ま
 みる、一、あ
 ちの、世、
 た、ま、い、
 して、ま、
 あり、ま、
 たり、ま、
 あり、ま、
 あり、ま、
 あり、ま、
 の、志、
 あり、ま、

一色が龍虎門より松竹を
 たき入たすく日比梅あり
 此比びく並なる梅の在り松竹
 よて懸たまりてありまらんり
 をねふまねふのさくなれし
 松竹ありあへくありいりま
 きまりねとわつてありれれ
 やうし万のまの竟宴のありと
 や名付侍らんしむりく誰人
 芦火くなくともせしめく笑
 けのまもくこのちとあさ
 まのあらんし

貞享四年丁卯三月七日

松竹の影

才一梅 何人

才一梅の才本まれし
 才よ世志めんこの園乃ま
 乃とあるあをわらる
 里のあ男もまわらん
 おくまにねれぬ山本よ
 ありしの松竹まのま
 もた又いつの月れり
 おさるをあらく松竹あり

後信藤原

片岡

三六

昌純

昌札

明業

重好

言直

茂吉

迫門越てゆく舟をこれ秋の海宗並
はま清物方麻の 夕夕夕 其雨
打まいく船をの末はあし 乃志
芦の丸屋は 風もさあ也 其院
あましくも舟をすのひあまきき 宗月
あまのなやう 志さわひなまき 西帆
捨てはまぢれまぢれやまぢれ 乃清
真世のおをといつてまぢれん 乃栄
かぶつてまぢれまぢれまぢれん 宗冬
あいにまぢれまぢれまぢれん 言直
あましくぬんまぢれまぢれまぢれん 重好
あましくけまぢれまぢれまぢれん 宗益
とめりつて月まぢれまぢれまぢれん 宗益
うらひまぢれまぢれまぢれまぢれん 社乃志

特在舟人の事あり給なり 宗岡
山陰ともく 西まぢれまぢれ 宗月
さやまの目まぢれまぢれまぢれ 宗院
宗法のわたりやまぢれまぢれ 宗冬
言わく何れかまぢれまぢれ 西帆
柳も竹もまぢれまぢれ 重好
ゆくとくと神まぢれまぢれ 言直
戸はくまぢれまぢれ 西帆
雲まぢれまぢれ 月まぢれ 宗冬
病のまぢれまぢれ 宗院
常りまぢれまぢれ 宗冬
うらまぢれまぢれ 西帆
打まぢれまぢれ 宗月
まぢれまぢれ 宗院

いづき世の終りつゝある花の常宗
行幸してのまふりありて言直
夕暮をむくみ方へへりて言直
すけの世にいらぬまはる言直
しる海つまて鳴けし時を言直
ねさめまひりし草の世の角言直
よひをいへん松の下座を言直
まげえまきくわく言直
いひ世さうくを契におぼつま言直
悔しとらるるわづらひの中言直
白糸もうまはまはるのまをい言直
んあつらん候つ世の波言直
月より今もまもあつて言直
世のわづらひもあつたしる言直
言直

おとせしとらるるわづらひの中言直
悔しとらるるわづらひの中言直
白糸もうまはまはるのまをい言直
んあつらん候つ世の波言直
月より今もまもあつて言直
世のわづらひもあつたしる言直
言直

お花もさうお傳らうは後で 宗峯
日吉のまゝお祈さいはより 辰吉
うまきくらわの渡にねるん西吹
けのはれひき床ゆる 言直
はまきても月またゆふ泊取 宗月
やとりいつとたつおきよ色 乃松
更おまといらふまゝお妹つ 宗直
よき世の物よまをさうひら 宗峯
唐三好もまおまの昔はけ 重好
まさ歌いつつ月のたうき 宗月
うまわるまよの書の時やう 辰吉
岩屋よ孫ぬ露のまより 西吹
辰吉おてれはあきく花の地 辰吉
はしりまらあの高は川山 重好

妻こめ 雛子の春を立えられ言直
実遊の春もさうし物助 辰吉
信川のまよむえ書えんせき 西吹
あやめかつとえ 陰ふくある 宗直
お月毎は露のうき露かた 宗峯
たははるもある 官の屋れあ 宗雨
あさよ六月の月の付ひよ 宗月
初をかるうり外山 西吹
あつとさお紫むらな書海 重好
何さめほも我がこと 言直
あさくハ方をいそひて 此の書た 宗峯
月よ揺ひて 何り 泉ゆる 宗峯
築地をよき書はやく 宗の 西吹
おまうよなるる 毎火の歌 辰吉

小車の先押おたたくし言直
 袖つぎはくえ 園を入るを
 限あきえ帰る玉あきえ
 いてまゝ一才れよまひ
 時めくハたひきま
 かりひのころそ
 いふま咲いふま
 ハまよああのだまひる山

実種一 宗岑十一 三純一

昌札一 明宗二 重好十

言直十 宗春八 宗慈九

宗南九 道恕九 長沈四

宗日九 西順十一 道活一

才二梅何衣

水戸

梅の花うきも月と名
 玉垣さよくま月と名
 志くくまえあめ
 踏の海

才三霞初何

立はあああまのま月城
 さうらう人今い
 うらぬうま
 西順

才四珠雲何恒

花の色やうそひて
 まをさるる象
 山近記里
 光映

供養

長祇

重晴

光映

才又み業 何何

あへて世の齡つむへきあり業^源成^貞
野之の雪色をあり玉乃ま^{貞信}
歩尺のふ除まき家言とけて^{丑枝}

才六賞 何何

うらひらの神言青逢あき雲^{清風}
ひらあき定まよした梅^{永田}
庭の面はおろ月夜の新見^{長院}

才七紅梅 何何

紅の梅よありあひし^{朝宗}
妻をふりめん^{山定}の内^{本捕}
ゆひ^信のま^八ま^八ま^八

才八柳 何何

玉柳をくあうむ^源式^勝正
波のあやをまき^水此^宗月
常^宗此^宗あ^宗み^宗さ^宗り^宗又^宗柳^宗り^宗

才九花 三子五音

みる花いんのおく^某此^某林^某式^某
袖^仲子^春を^春さ^春ぬ^春孝^春の^春梅^春
か^良衣^良ま^良る^良る^良月^良ハ^良静^良の^良子^良

才十花 山何

ち^宗る^宗そ^宗は^宗は^宗え^宗ん^宗の^宗む^宗れ^宗成^宗式^宗 志^宗宗^宗
あ^時れ^時ひ^時ら^時ら^時は^時ま^時実^時ある^時者^時 山^時中^時
あ^守ま^守く^守池^守子^守あ^守そ^守へ^守家^守 守^守之^守
あ^守う^守け^守て^守

才十一花 何衣

某

雲をれてまゝ家へもなす
風おさまれん乃とらある山
柴の戸をまれしあたる
某 杉

才十二月 何衣

夕はましぬ所おもも
ぬくくもとむる空の空
野の野
野のいまこ家あきく
流く
某 杉 宗信

才十三日 何田

花さるん目録子乃んぬ
葉をさるぬ葉の松風
雲やまこいそ和の陰よある
某 杉 宗信 也好

才十四日 一字書

人をわぬいふ事と花の
まきうづへし去乃云の
下地のひくもあふた乃と
宗信 吉真 小

才十五日 何路

柏村

志る雲もかき花の名
鳥のゆきとあけやの
福控おき岩岩
某 杉 宗信

才十六日 何水

入り新花おさまるひり
尾上の雲のぬえき
帰し鳥つえきか
長院 平波 虫浦 清

廿七日 鹿何

今井

花を拾ふ乃の志之や誰か風好親
まをさやさうく 常のありき
恒向をあさくけある遊を 定次
しげし

廿十八日 柳何

在治

永日毛空 白妙花の雲 某
山はうもをわけかた 僧 松栄
石鳥のちくねうらうら 森松

廿十九日 柳何

從信景

志をさあま 山はひび 花梅 義孝
かまきてをいあけ不の山 亜信
信將ぬを立るや志 昌俊

廿二十日 柳何

この此れ面のいろのや柳梅 昌礼
まへてま月のあうねさ 山 西順
さ海姫の衣やして 宗根

廿廿一日 柳何

万年

を志すぬ陰や志 此花梅 柳之
右ふらひひま 言直
新ら 定重

廿廿二日 柳何

万全

先を足ひ花をわく 本此柳梅 柳治
時をたふを物る 志の面 小田 正貞
すねを山田の系よ 下立て 勝徳

才北三月何人

いま楊笠よあつてふも共重好
嵐の孫ねおく山北去 乃志
かさるねあふ常の情や 幸蘭

才北四雛子下何

来吉

草もつまつまこめもつて共相出
廣野の夕夕もむ目丸色 幸蘭
海辺の水あさつてふも面晴し 本廣

才北五蝶舞何

来吉

まは日れめくあつてむ相持共
野もつるほくあまの次 吉真
福あまこ小らの場さ 明榮

才北六苗代 四子下略

山持

むへそろあし 苗代あは保縁正
堤かくれの春北 春草 重春
面もく依何へのとも日ハ 乃清

才北七海原 秋何

秋野

浦原よまつ久才北雲井共本
浦原あつけきああふの春乃次
山あまこまの春やあつ 利榮

才北八藤 玉何

平

咲の如敷さくへあ世松の春恵之
花へえひろくあむじこの春 乃志
乃ともまを共砂よ春乃次 正次
あつて飛て

才北九山吹何船

山吹よかき岸てくもく無志能
何者のこもくくるぬれ流 正次
高車凡よ棹のいさく船行 妻

才三才永日何文

くるく日を拓く手も去の意空
ちりてさくさく此の秋ある陰 松作
なるとく尾とのまのいさくよ 源吉

才北一新樹花何

おろもよ見れん人のあも地 八本
才三才うとまき 山ほとまん 正勝
新樹もかきりの出と 小田 定重
政勝

才北二郭云白何

鳴りや雲よまきある郭云 勝成
橋ハ色よ咲はくく陰 正能
何あふのふ首の思ハをを 主好

才三十三月 片何

心をまきうとまれぬ喜そ 某
花もてゆへふこのあ本恒 正美
むくぬれやとりあきくえ 正三
出巻て

才三十三月 何田

ねおろねえんのまきや何名のまき
志くしあめれ枕ゆめ麻 勝成
又月ぬのまき君此新く 為成
月見て

才朮五布花 尾何

松の雷をふかきくわやあま^{石野}産正
るより後ハあれ 互系 ^{正祇}
井園あま^{特許}波名月を ^{重正}

才朮六有親 何草

涼 ^也さや志けき中此有親 不名
面ハくまねとふる 友山 ね欠
雲るるるこめくひく ^{志能}

才朮七有竹

何垣

石野

わ竹のより元加こおん朝式定春
ねえあまえま郭一云 ^{翁月}
此の月をま ^{権業}

才朮八掃 花何

楊ハとこ世のくふふ此種 月
さ月の朝を朝よる比 ^{重正}
郭云くくよね是の加ひ ^{正祇}

才朮九蒲 三文字略

石野

若のこをひくまて旬 ^{重正}あま月
神よ加れるさこそれ乃 ^{重正}友園
礼花はるるを入家 ^{重正}麻明 言正

才朮十有月 雨又何

さこそれ此は何 ^{重正}時 ^{重正}れ入 ^{重正}災 ^{重正}言
字 ^{重正}原 ^{重正}加 ^{重正}さ ^{重正}ま ^{重正}と ^{重正}書 ^{重正}る ^{重正}言
皆の登此 ^{重正}あ ^{重正}る ^{重正}ハ ^{重正}風 ^{重正}の ^{重正}吹 ^{重正} ^{重正}言

才字一橋喜何

家おちて西雲とるあき北 兼隆
乃のゆきてよきく 時志 治良
糸揚を山へよきく 川島 素舟

才字二田苗出何

おまひくまの風をる早苗式 佐橋 佳志
登山うゆかきささるぬぬ 定次
郭の云里田あうくあきす 今布 守時

才字三夏月何也

能あややよきくもる夏月正元 平
はくくまをくく人何とん定春
初のきくも成宿時ね 宗信

才字四雲干何

草のあやまゆとれと兼隆信定 海
能凡もまきくしむぬぬ 正春
寝衣夕八月をがくま 佳君

才字五又彈唐何

目のちもろく楸や柳のあ正重 北
立やまへ成友山の陰 政務
むまひもる思るの法あ 正春

才字六蓮何人

小こりほえ法まを蓮式 伊坂 長
みふれてまきし 彼の白あ 今布 正春
又風よまきふれつえ取う 一水

才五十七白雨何如

秋登

夕立の雨は水たまりを

な久保

戻り元始くまはく異汗

秋登

神ちをあら雲の影を

秋登

才五十八細涼何如

何故の花は酔了や夕涼光映

茂秋柳の移り月影

分ゆし思へるは世を

秋登

才五十九泉何心

秋登

しよふふふをよきあ

秋登

竹の葉をよきあ

秋登

郭公胡戸いふあ

秋登

才六十秋山何

栗町左近

よる波の白ゆき

秋登

杖をよきあ

秋登

ひよあゆむ

秋登

才六十一桐何如

秋登

桐のよきあ

秋登

朝戸あふまき

秋登

八重草

秋登

才六十二萩何

秋登

やや人のよきあ

秋登

月待お泉山さとの

秋登

何事よわきあ

秋登

秋登

才又十三廿杖山何

待て月まの程見せよ
月出ぬるのおくまの下
おのれの糸面は厚れを
友清
志方

才又十四為新何

白露もいつらめ分し
はしめて見つる秋杖の花
袴衣小窓をを飛之又
宗水
新谷

才又十五為下何

船やをのり色なる房
下立雲よめつ風
とよみ秋少風や
三玉
永野
吉原

才又十六虫何世

うねり魚よ舌をく
文ゆく月をやと
詠里毛衣亦絶人
あ井

才又十七雲何水

雲こめて山の姿
あさ六秋風吹
調をとらる友此
ま

才又十八何二番歌

中を記ぬる歌を
松よ吹よる月乃下風
色深き事紫加つ
伊勢村
廣重
和菜
清政
ちるまゆり

才六十九日 何人

非京

妻方いきて 鴻うくれゆく 但志
仲い嵐やまきさ 雁うよ 又見
ひく声此なきこ 加こある 宗根
ひく聲 宗月

才六十 秋田白何

時として 姿を色つく 田原志規
や 風をま 雁わらるる 正信
軒上此おふ月 月の下の 林葉
めさて

才六十一 草花夕何

夕ふきや又 花ふきる 草花 志規
秋のを 我志むる 恒也 負林
山をに 麻の 宿の 山 正信

才六十二 二月初何

里村法橋

この年 中を 浦や 月の 和昌純
い 世 法の ねれ 秋風 里村
それさ 志 踏 雁の 志規 宗峯
あて

才六十三 何人

西田

満ちる 月い 世を 志 志規 久任
あつらう ささめ ね 志 志規 志規
て 信 雁を のう ね 風を むき 信 隆
立て

才六十四 何人

寐ぬ 人を 志 志規 志規 明宗
まらう の 下は 志 志規 志規 志規
旅衣 秋の 志 志規 志規
宗峯

才六十八日 喜何

この宿や伊勢の山をなす月真因
朝を乃露おる面をまきし 秋言盡
まき松の露吹くも梅風立 友信

才六十六日 何何

たぐくみき方やまふを北浦のまき
草のまきゆり波の白露 友信
東合せしみき毛尾も 宗直

才六十七日 何人

けこつおむううの家流の月を雨
雲ののまきハうまに秋の松 友信
軒とれた竹のまき毛尾も 乃松

才六十八日 何何

隈家しかくまの月のと青まき
露吹つくも 山の松 友信
色あまうまののまき毛尾も 宗直

才六十九日 何風

雲を都とちりしてまき毛尾も 宗直
夕日の乃ちまき 秋風 友信
びく時あまのまき毛尾も 梅吟

才七十日 何何

ゆくの果あまの月の詠か 乃松
海への露ハをまき毛尾も 友信
をく毛尾をみくも 乃松の 宗直

才七十一回 何

陰々しし風よ本をさし 吉良
おやそみちの錦 越の月
瑞 東歌山へをさく秋更 正貞

才七十二雁 子何

ふつあふや夕よ志しぬ扇の正長 志
云々 志
秋更 友後

才七十三石 何

うつあや子夜のお光さよ 猪政
おそえ更ゆく玉明乃月 衣 柳家
庭の面へ玉あかり 春並て 松甫

才七十四麻 二字五者

秋を麻のまうへ 志
そみちそ人のとぬおの戸 定春
いと垣の秋をさう 時海下 茂吟

才七十五紅葉 何者

そみちその色は 小西
菊をうへ 宗賢
あまね砂のうへ 川崎 宗貞

才七十六桃 何水

朝帯よいろ 天時
山陰さらし 宗貞
月とらさ 宗賢

才七十七日 何歌

秋ハ更ニ風のうめなる葉葉式まま
叶五してとこきー山松の露 乃馬
雲男毛御月の光ハ うきあよて 正玉

才七十八日 何歌

葉毛尾もまきまつさぬ 秋紅雲 秋
秋のあけまをつらる麻のよ 秋紅雲 奪
一花きと枕は野の月更 貞

才七十九日 何歌

世よまき葉をひひろりて 葉毛 葉
秋のまきめ毛うこきまきまき 宗玉
海身しちいふふ月の乾沈 中島 正房

才八十日 何歌

秋日のうらう葉まうふ 正玉 葉
うきまき葉も 沉じはれぬ 季保
た、まきまき おちて 秋の月 正玉

才八十一日 何歌

叶五して秋は松のこき 南坊 葉沈
木葉まきまき 氷さん ぬき今の夕風一葉
谷川やまのこきまき あ休

才八十二日 何歌

山風のやもりハ谷村おちた 掃懸
まきまき麻のさきまき 秋水
露衣志やうき ありて ぬの目を ゆづ

才八十三 雲 何

らうらうの雲の裏よりうらうらうの雲が正哉
うへをくぐり松の冬をくぐり松の陰 正
松子の志がめぐる後を又嘆し 正

才八十四 雲 何

冬をくぐり松の冬をくぐり松の陰 正
をくぐり松の冬をくぐり松の陰 正
くまわると高砂地さらさら 柳

才八十五 雲 何

子世も終んぬりし松の冬をくぐり松の陰 正
まへて松の影をくぐり松の陰 正
松の戸はぬたき風吹く 正

才八十六 冬月 何

くもらぬや木の葉はぬる月 信
白妙よをくぐり松の冬をくぐり松の陰 正
鶴鳴する面の糸や廣く 三

才八十七 雲 何

山おりし新やあまの玉の 幸
楯のうきをくぐり松の冬をくぐり松の陰 正
鶴人の分ちゆる松の冬をくぐり松の陰 正

才八十八 雲 白何

手印して降や大ねの 正
井垣のうらへはくぬ風 正
清めをくぐり松の冬をくぐり松の陰 正

才八十九月 何木

白樺よ見るとや盛雪の 宗春
多も亦せと山さしとる 宗春
枕かゝ雲路よぬむ 宗春
信

才九十雪々何

浪もとるくや玉のふ浦 宗春
を 宗春
何 宗春
雪 宗春

才九十一日花々何

招きく 宗春
月影 宗春
さよ 宗春

才九十二日 何風

んあ 宗春
何 宗春
氷 宗春

才九十三氷 何

必 宗春
吹 宗春
夕 宗春

才九十四 何衣

ね 宗春
氷 宗春
わ 宗春

才九十八水多知何

研家御と程やうとねれ 本房
氷の上れ月とめれ 鴨の空
白妙と赤砂地 湯く霧垂し 元音

才九十九靈異 何人

和の花朝とまらるる 次信
定もる 風毛をさく言 志之
うさねれ 枕と月の氣 佳風

才九十七好火 三三事略

うつ三火ようごのそゆ 新務 正音
三冬ハこりる 京北戸の内 明業
傳書と御とあうとめて 訓久任

才九十八早梅山何

梅咲てあ 大と厚と 宇春
あはは雪の晴 冬毛奇 昌純
出泉見や雪もとく 新 村 幸菫

才九十九非余 何人

あまたの 雪ははあう 西吹
八度 庭や小雲の 白木綿 山房
朝よ日に 敷れ 本房 昌純
おちるを

東神林の何人

里村法眼

かえあけてあふふを井よ里林の昌隆
さくさく帯をあらふ人の素 長秋
年を多にほふもさくらぬ松見 宗春
花ハ梅燈の陰あつても也 宗根
行くも禁れまは月乃香 本房
やとりもあひ秋乃山越 正矩
吹風のそよめくぬのきつて 宗吟
病せて居るよみれくも 春良

敵うも此目ハ底から海軍守之
以て此零のときさるるも 勝政
うことさく雷うめり小田の系 重吉
戦さ終る 竹の一し 重吉
雲のわがし山雲ハ相さひ 重吉
たふやま柴井あり 重吉 宗岑
志く 重吉 重吉 重吉 重吉
うさしてさうま色さのじ人 宗吉
思ひあまるんや重吉うさし長根
あつてもあつて 重吉 宗岑
あつてして別あの中も重吉 宗根
月さうとれ岸生の法 宗吟
柱をける花を乃と只友 正矩
あつておとさしたの 重吉 神守之

遠へは 松ゆきける 重吉 宗吉
あつてくさるるかのあ人 重吉
山科の棲しむをのりして勝政
あつてはのりれ 一とちき重
いつくさるる重吉 重吉 重吉
いろよ松 風のりさるる重吉
川琴をあさくけさひ力り 宗岑
下まつ 園は月をけ 重吉 宗根
天はあ松をささも重吉 宗吉
ささるるも 重吉 重吉 重吉
自を扱つ おまをさる重吉 宗吉
重吉も 重吉 重吉 重吉
園やうし水のゆきもかれ 宗吟
所は水のゆきもかれ 勝政

善やうぬひり、松のまゝ守之
おのへれ言ははつて中ありて
いふおおくいふ、さうせれ言
かひひささるまのあつて宗
行ひひあまぬりも覚果て
九うさぬの書名をたしき宗
ふせませと君をや詠もあつて
よとあつあつあれ品く、本
名をまゝおのれうまき宗根
社をまゝあつて宗根
月うすたあつて宗根
喜ひやうなる依保の山風守之
むくまれ揃とれ、夜を勝政
柳またくううつさういふ、

まのまゝいふ松のまゝ守之
あつて宗根
いふ、宗根
わつて宗根
いふ、宗根
本をまゝ宗根
山原くまけい、宗根
月よう宗根、宗根
權つて宗根
佛のおまゝ、宗根
船もまゝ、宗根
たれ、宗根
堂外、宗根
つて宗根

福生とれたおんるたよぬ 宗吟
あはれいふるた信の山をわたり 宗吟
まはのそとふ出あつる乃お木屑
米あふく あせのわうあ 守之
あわらむ野箱の葉も清く 宗吟
小葉のまうく日ハくぬ 宗根
行くてうくおままらる麻衣を齒
ひまのまはれれ末いふまは猪政
わらまこのあおぬいふと驚く 宗基
あまのまおぬいふと驚く 宗吟
あやうておまのほれ月ハ 守之
まけんは世をわたりくわぬ 宗吟
有格よとせらるやいふらん 宗根
わてうらうらんや不たぬ 宗基

つねねおんのそくゆおつる宗吟
とひーゆりやあまの神まぬ
うらうらん人のむくんをぬ 宗吟
あひあつるやまのまげ 宗基
おまひ健すもよるとけは 宗基
たのましかあひー秋のまひあふ之
まはのあはれめこのわをゆ 猪政
よまへくあはれまはるあひの 宗根
あまあまはあまらるあひの 宗基
ちうま隣の 宗吟
ゆまうまわりのまへん 宗吟
あまらうまわりのまへん 宗吟
いつらうまわりのまへん 宗吟
木のあまをさうしての 宗吟

をしりぬきやまのりやまのりやまのりやまのり
 山のあまのり日ハあまのりやまのり
 ちのちをわしわらちまのり
 庵をきくわら橋の下
 宇治河やせの白波さく
 みやこよいせと風をきせぬ
 つくよあまのり
 をりてふ日と
 長祇四 宗春十三 宗長
 十 正雅三 宗吟十一 春良三
 守之十 勝政九 重吉三 吉真三
 重實八 宗岑十 道隆一
 追和之干句

才二子目何如

中書阿

村わらぬねやまのり 神子日 正雅
 社ゆりきまのり 美人 如用
 清せのり雪の降留川 如用

才二子何如

雪のあまのりやまのり 引のり 宗吟
 梅北梅毛いあまのり 宗吟
 何とてあまのり 宗吟

才三子何如

自序

うらぬあまのりやまのり 宗吟
 風和月夜去の海了 宗吟
 帰房つるまのりやまのり 宗吟

才曰余花何才 鼻持

花の色よんぬまらる 正因

面のやうらゝま山の陰 福成

時をくたをかく家夢 信田

才又清水何人

先枕法あるをひきよ 秀後

分る 松若

言わねるまハ文たつ 言因

才六楸 何田

秋の夢楸よ見ゆ家後 宗室

あゝま 信田

新るる月よ志 如閑

才七番 何何

松よん 正後

初れ 正後

秋の水 正後

才八月 三才

て 宗信

座 宗信

筑 宗信

才九風 何馬

本 宗信

く 宗信

何 宗信

才十常 知何

侍人のとねえ原雪の原の牧

三つとつゝ泉陰の山里に産

まをさるをよきけよ産を産後産後

朽煖て

桑楊舎

知人

